S.O.E. News no.30
ホームページもご覧ください
NPO-SOE.JP
NPO センスオブアース・市民による自然共生パンゲア からのお知らせ
2007.11

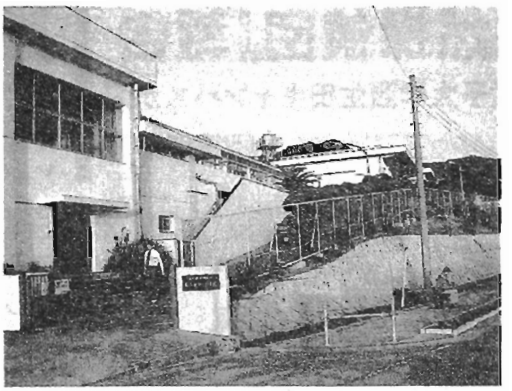
いたばし
ビオトープ
ネットワーク
学校訪問シリーズ 14

めぐまれた自然条件を活かした環境教育

～四季の変化を感じとれる子になってもらいたい～

板橋区立天津わかしお学校

学校の概要

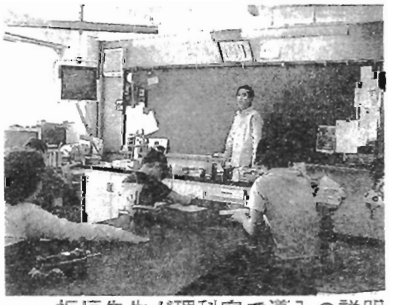

校門より校舎を望む

ＪＲ外房線の安房小湊駅から車で約１０分、外房の海を一望できる高台という条件にめぐまれた天津わかしお学校。同校は「病弱特別支援学校」として開校され、今年度が40周年にあたる。板橋区立小学校に通う児童のうち、健康上の課題がある子どもたちを受けいれている。現在37名の児童（３～６年生）が在籍し、寄宿舎で共同生活しながら学んでいる。正規の小学校教育のほか、自立活動（肥満・喘息・偏食・虚弱等を改善するための学習）を週２時間行っている。昨年に続き今年も、全日本小学校ホームページ大賞の東京都優秀校（特別支援学校部門）に選ばれた。

同校の教育課程をみると、「自然環境への理解を深める」、「自然豊かな立地条件を活かした問題解決的な学習や体験的な学習を工夫する」とあり、めぐまれた自然環境を活かそうという意欲が伝わってくる。寄宿舎の活動にも、磯遊びや野菜栽培などの自然体験がふんだんに取りいれられている。ＳＯＥとしては、ぜひ一度訪れたかった学校である（10月25日訪問）。

環境教育の実際

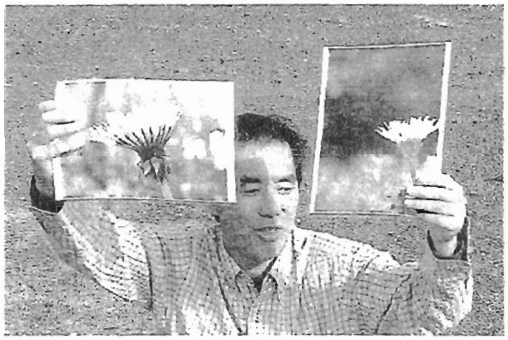
この日に見学させていただいた授業は、６年生（出席児童７名）の総合的な学習の時間（環境教育）であった。テーマは「植物（タンポポ）は知っている！！！」。担当は板垣博先生。


板垣先生が理科室で導入の説明

はじめに理科室に集合し、これまで植物について習ってきた理科の授業の内容を振りかえった（植物の発芽・成長の条件、受粉から結実までの過程、植物と人間との関係など･･･）。そのうえで板垣先生は、この日の授業が理科の授業のまとめにあたることを話し、「外を歩きながら『植物が何を言っているか』を考えてみよう」と子どもたちにもちかけた。

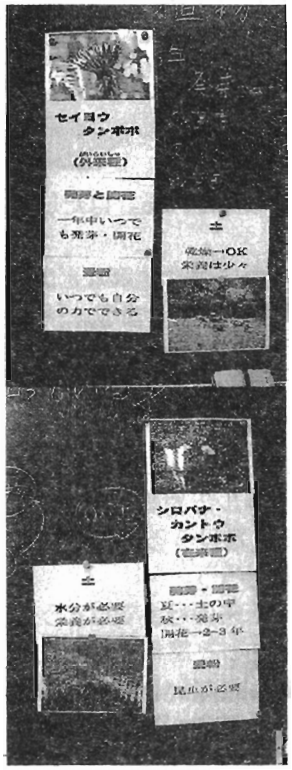
授業の意味を理解した子どもたちは、期待感をもって外に飛びだした。少し歩いたところで、道端に生えている草を調べ、セイタカアワダチソウやススキが多いことを確認。次に海辺の広場に出て、中央部から全体を見渡し、セイタカアワダチソウが黄色い花をたくさんつけていることに気づいた。板垣先生は、この草が元々この地域に生えていたものではなく、外来種（外国からやってきたもの）

広場の草の様子を解説


左がセイヨウタンポポ、右がカントウタンポポ

だということを子どもたちに説明した。

次に、同じ黄色い花ということでタンポポに話題がうつる。板垣先生は、両手でカントウタンポポとセイヨウタンポポの写真をかかげ、両者の違いを説明。それを受けて、子どもたちは「広場のタンポポはどっちだろう？」と興味深く調べまわった。「あっ、セイヨウだ」、「これもセイヨウ」と次々と声があがり、すべてセイヨウタンポポであることを発見！　こうして、この広場には外来種が一杯だということをみんなで理解したのだ。



セイヨウタンポポ(上)とカントウ(シロバナ)タンポポ(下)の特徴

その後、板垣先生の案内で校区をぐるりと散歩しながら、楽しい植物観察のツアー。グミの実を食べ、オシロイバナの実を摘み、ジュズダマの実を集め･･･、そして道端のタンポポはすべて「セイヨウ」であることも確認した（ただし春には、在来種のカントウタンポポやシロバナタンポポも花を咲かせているとのこと）。

授業の締めくくりは、再び理科室にて。まず、板垣先生が在来種タンポポと外来種タンポポの生育条件の違いを説明。そのうえで、「(天津ではまだ在来種のカントウタンポポやシロバナタンポポがしっかりと生きているのに)これらがなぜ都会（板橋区）で少なくなってきたのだろうか」と投げかけ、人間の開発行為が環境悪化や土壌の劣化などを招き、在来種の生育条件をうばってきたことにまで、みんなの考えを発展させていった。

授業の最後、板垣先生が子どもたちに訴えた言葉が印象的だ。「外来種を嫌いにならないでほしい。外来種は悪いヤツではない。むしろ、環境悪化の黄信号を灯して、大事なことを教えてくれているのだよ。」植物への愛情と環境保護への思い、そして子どもたちには自然との共生の感覚をぜひ身につけてほしいという期待。板垣先生の熱意と温かい心が伝わってくる授業であった。

板垣先生との一問一答

Q．環境教育についての板垣先生のお考えは？

A．今の子どもたちは温暖化、酸性雨などの言葉はよく知っていても、具体的な自然現象に触れていない。だから、タンポポなど一つの事象にスポットを当て、それについて考えさせるのが環境教育の役割だと思う。とくに、実際にさわる、匂いをかぐなど、五感を使う体験が大事だ。

Q．子どもたちに何を期待しますか？

A．四季の変化を感じとれる子になってもらいたい。季節感＝環境教育、環境教育＝季節感だ。この学校では、豆まき、お月見、菖蒲湯などの季節行事を大切にしているし、各季節の自然を体験させるためにできるだけ外に連れて行く。卒業生が久しぶりに来校したとき、寮の先生たちと外に出て「あのとき食べた桑の実がおいしかった」などと話している。このように、経験が心に残ることによって、大人になったときにそれを次の世代に伝えられるし、よい環境をつくろうというプラス志向の取り組みができる人間になると思う。

Q．これからの課題はありますか？

A．本校の子どもたちは、都会に暮らしながらこちらにも住んでいる。だから、都会とこちらの自然を比較することで、学習のメリットが生まれる。そういう教材を作っていきたい。今日はタンポポでやったが、動物にしても、昆虫にしてもできると思う。理科だけだと可能性の範囲が狭くなるので、総合的な学習のような自由で活動的な授業で学習を成立させることしかできないが、そのような機会を作っていきたい。

向かって右が前野哲夫校長先生、
左が板垣博先生（主幹）

『自然探偵団』報告

日本女子大学西生田キャンパスから

10月20日(土)21日(日)、日本女子大学西生田校舎・文化祭一日女祭(ひめのさい)で自然観察会の展示やナチュラル素材での創作活動を提案しました。学生たちはとても、意欲的です。上記の自然観察会での発見や、センスオブアース主催の沖縄慶瀬海のエコツアーの報告も展示しました。展示を見た学生から、来年是非いってみたいという声が聞こえました。

講師の高橋先生の詳しい説明に
雑草が植物になる瞬間（秋の観察会から）

日本女子大学西生田キャンパスのサークル「自然探偵団」は教育学科の先輩方が立ち上げた自然に関するものに触れる活動しています。先月行われた日女祭（文化祭）で私たちは秋に行った観察会の様子について展示しました。

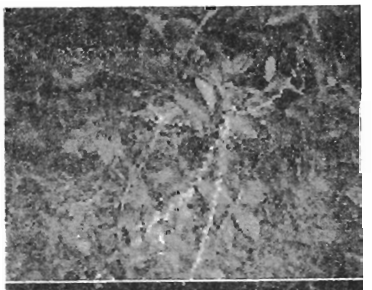
秋の観察会は９月２７日のまだ暑さが残る秋晴れの中、部員５名と講師の高橋先生、顧問の田中先生、センス オブ アースの寺田先生という豪華なメンバー、さらに高橋先生から部員全員にプレゼントしていただいたルーペを手に持ちスタートしました。

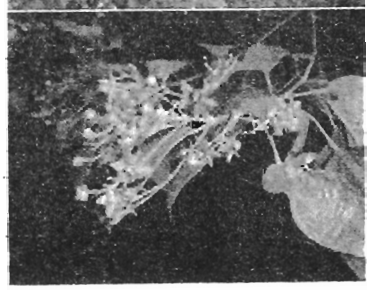
毎回水田記念公園（山）の中を散策していくコースですが、今回は水田記念公園の入り口からテニスコートから山を通り正門へ向かう道中の植物を観察していくコースでした。スタートしてから数秒でさっそく目をひいたのは、みずひきでした。みずひきは一見花のように見えない小さな花の集まりです。手にしたルーペで観察すると、外側は赤いのですが、中は白く可愛らしい花が咲いているのだということに気づけました。そして、さらによく見てみると、先端に白い鍵つめのようなものが出ているのが分かりました。これは、この鍵つめが動物の毛にひっかかり、外へ種子を運んでいってもらう仕組みだそうです。

100 m歩いた地点あたりに、茎が赤く、青黒い実がついた枝が落ちているのを発見しました。キレイだなぁと思いながら、特に気にせず歩を進めようとしたら、高橋先生が「これはミズキですね。この色は二色効果っていうのよ。」と教えてくださいました。「二色効果？」とはじめて聞く単語に疑問符があがりました。先生に伺うと二色効果というのは、鳥に実を食べてもらい、種子を遠くまで鳥とともに運んでもらうための工夫なのだそうです。何故、赤や黒なのかというと鳥が特に高い関心を示すといわれているからだそうです。

少し歩いては新たな植物の発見というペースでいたら、約 150m 歩くのに２時間程度もかかってしまいました。高橋先生と一緒に散策するだけでこんなに新しい発見ができるのには毎回驚かされています。今後もこの調子で観察会を行い、文化祭等の場で発表できたらと思います。(日本女子大学の学生からのレポート)

ミズヒキ



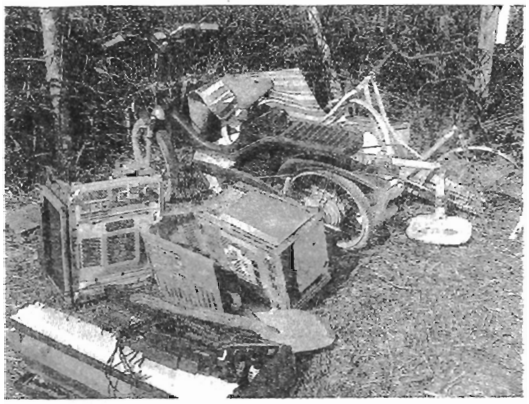


ミズキ

いつまで続く、このイタチごっこ

10.28荒川クリーンエイドに参加したメンバーのひとりごと

10月２８日
荒川クリーンエイド
板橋区立自然生態園会場

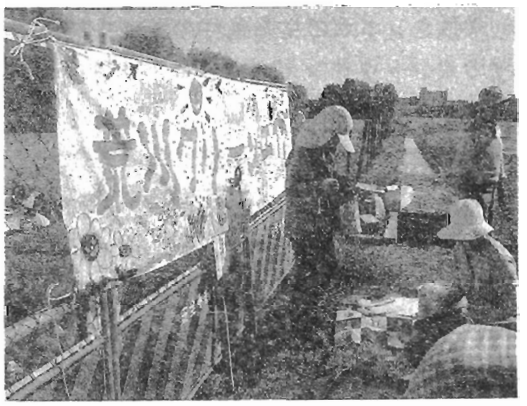


コンビニから弁当を買ってきて食べ終わると、テーブルの上には想像以上のゴミが散乱する。その残骸を前にすると、なんとなくゴミまで買ってきたような気持になるものだ。

「リサイクル」やら「省資源」やら「環境にやさしい」をうたい文句にした商品が横行する世の中ではあるが、荒川の河川敷にやってくるとそんな言葉も空々しいものに感じてしまう。

「荒川クリーンエイド」は毎年２回開催され、多くのボランティアがごみ袋を片手に河川敷をローラー式に歩きまわる。何度かこのイベントに参加しているが、毎回大量のゴミが収集される。はたして（投棄される）ゴミは減っているんだろうか？

中には冷蔵庫などの家電製品などもあり、これを投棄した人はよくもまぁここまで運んできたものだとあきれてしまう。「もったいない」という言葉の意味は、遠い過去の遺物になってしまったのだろうか？



ゴミを捨てる人がいる。そして拾う人がいる。その間にはなんの契約関係もない。できることならこんなイベントはないに越したことはないのである。
モラルの問題であることは間違いないが、これだけのゴミになりうるものを作り出す世の中の構造にも問題があるだろう。

未来の社会ではどうなっているんだろうか？

もっと簡単にゴミを出さない社会が確立されているかもしれない。あるいはもっと簡単にリサイクルができる夢の装置が発明されているかもしれない。そして「かつて人類は大量にゴミを出し、公共の場に投棄していた時代があった……」などという記述が教科書に載り、21世紀の社会現象を不思議な価値観として捉えるような社会になっていることを夢想しながら、今回も大量のごみを前にして汗をぬぐったものである。（S）

●おもな散乱ごみの変化（2005～2006：ベスト20）

'06年順位	'05年順位	<品　目>
1	1	レジンペレット（プラスチックのつぶ）
2	3	食品などのポリ袋と破片
3	10	発泡スチロールと破片
4	7	ペットボトル
5	2	煙草の吸殻とフィルター
6	5	コンビニなどの袋
7	4	紙屑、紙片
8	12	やわらかいプラスチック製品
9	6	缶
10	13	弁当やカップめんの容器
11	8	硬いプラスチック製品
12	9	蓋やキャップ
13	14	ビン
14	17	食品トレイ
15	24	スプレー缶
16	18	花火カス
17	16	木材・木片
18	11	ガラス製品と破片
19	25	シャンプーや洗剤などの容器
20	19	金属片・針金

（荒川クリーンエイドフォーラム資料）

発行　特定非営利活動法人 センスオブアース・市民による自然共生パンゲア
東京事務所　東京都板橋区前野町４－８－６（〒174-0063）phone: 03-3960-6052　fax: 03-3960-6053
e-mail: info@npo-soe.jp　url: www.npo-soe.jp